

佐賀城跡

佐賀県佐賀城公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

発掘調査現地説明会資料

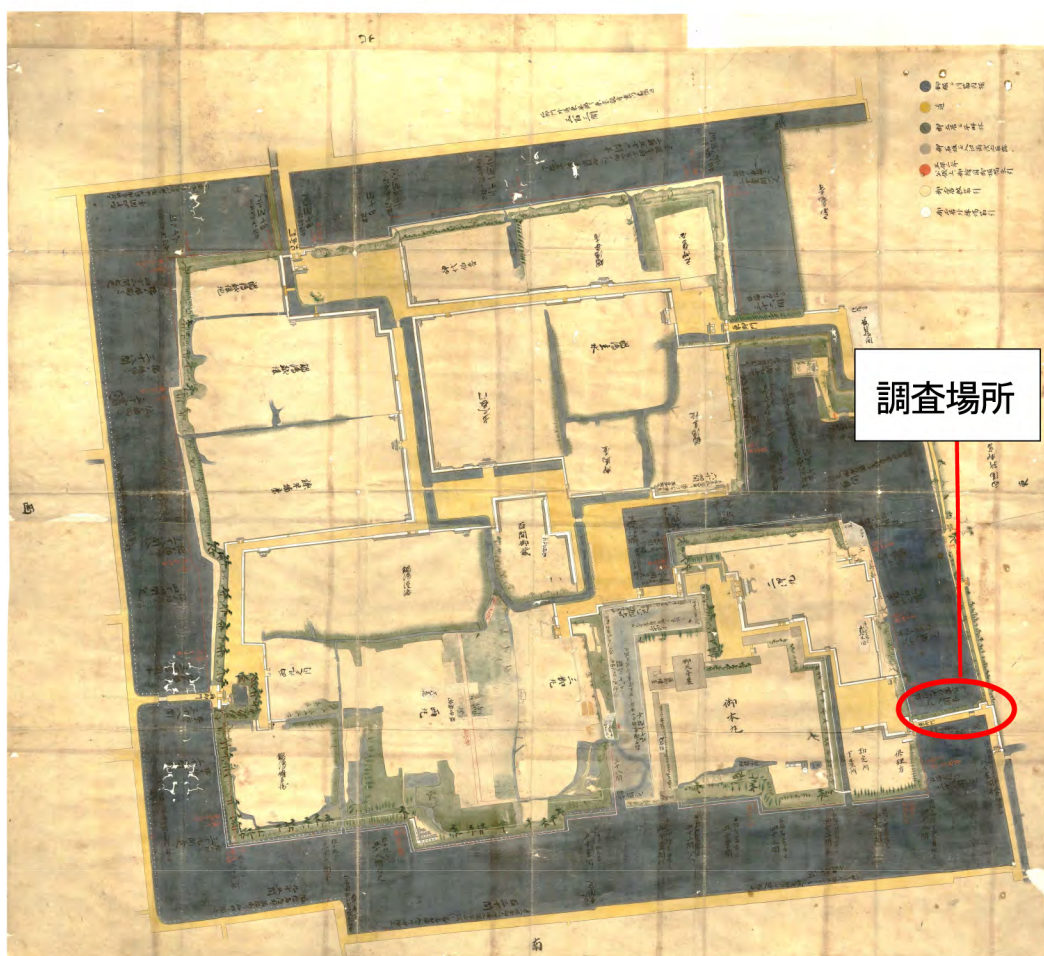


平成26年9月20日(土)
佐賀市教育委員会 文化振興課



発掘調査の概要

今回の調査は、佐賀県が実施している佐賀城東堀の復元工事に伴って、佐賀市が実施した埋蔵文化財の発掘調査です。平成26年の2月から断続的に調査を進めて参りました。今回の調査場所は、佐賀大学附属小学校グラウンドの東に位置し、江戸時代は佐賀城の裏御門とそこから東に延びる土橋があった場所にあたります。



『御城分間絵図』（寛政8〈1796〉年：公益財団法人鍋島報効会所蔵）

[遺 跡 名] 佐賀城跡8区・9区・10区

[所 在 地] 佐賀市城内二丁目

[調査面積] 60 m²

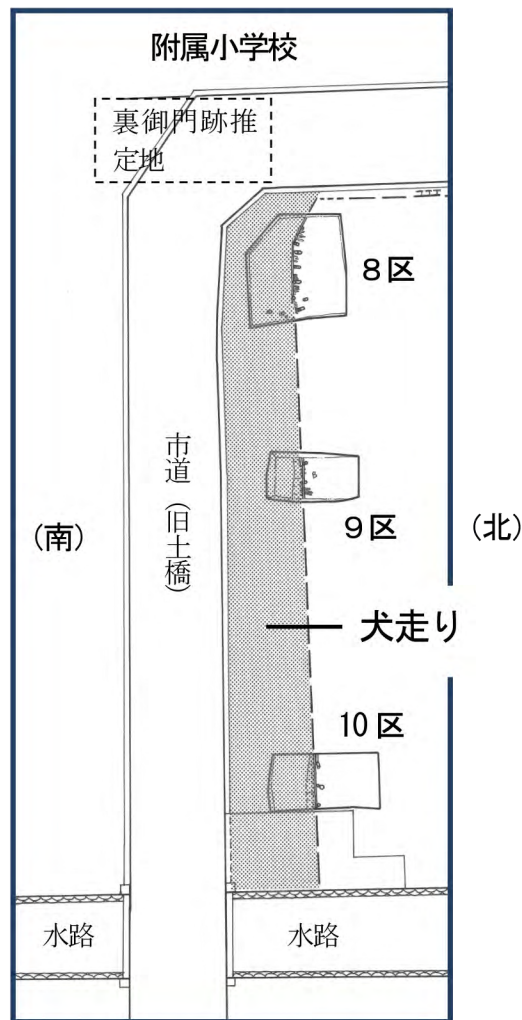
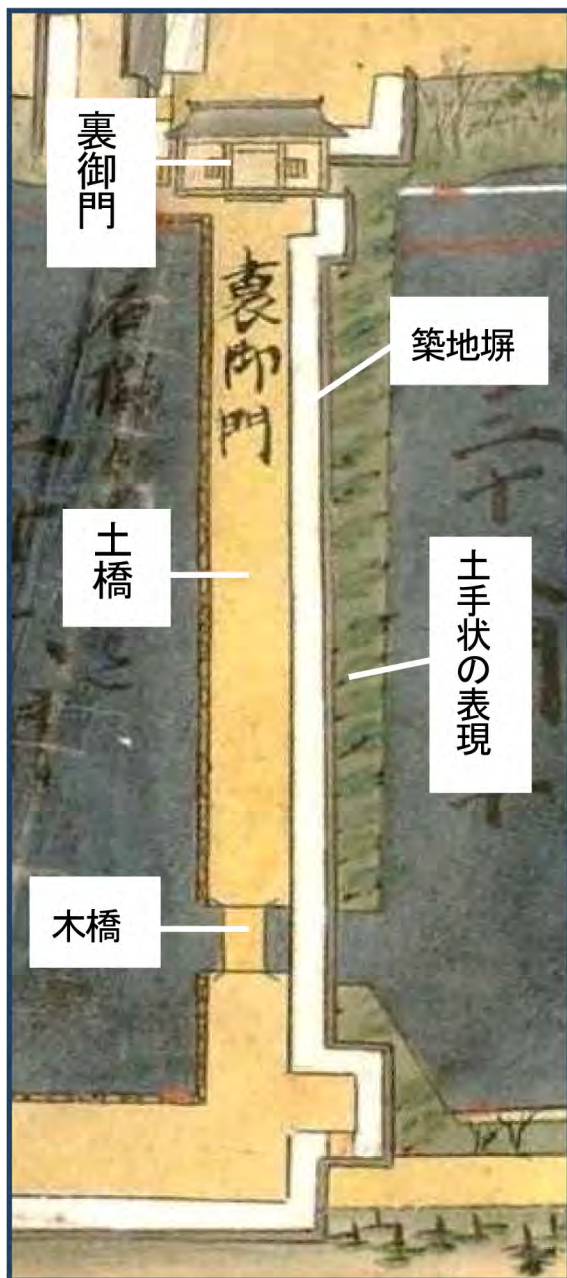
[調査期間] 平成26年2～3月・5～6月・9月

[確認遺構] 裏御門前の土橋北辺の犬走り遺構と護岸遺構

[調査機関] 佐賀市教育委員会 社会教育部 文化振興課

裏御門と橋

佐賀城には、城内と城下とを結ぶ通用口として西御門・北御門・東御門・裏御門の4つの門があり、堀内にはそれぞれ門から延びる土橋が設けられていました。今回確認したのは、裏御門から東方に延びる土橋の部分にあたります。



調査区配置図

(左)『御城分間絵図』(寛政8年)〈公益財団法人鍋島報効会所蔵〉

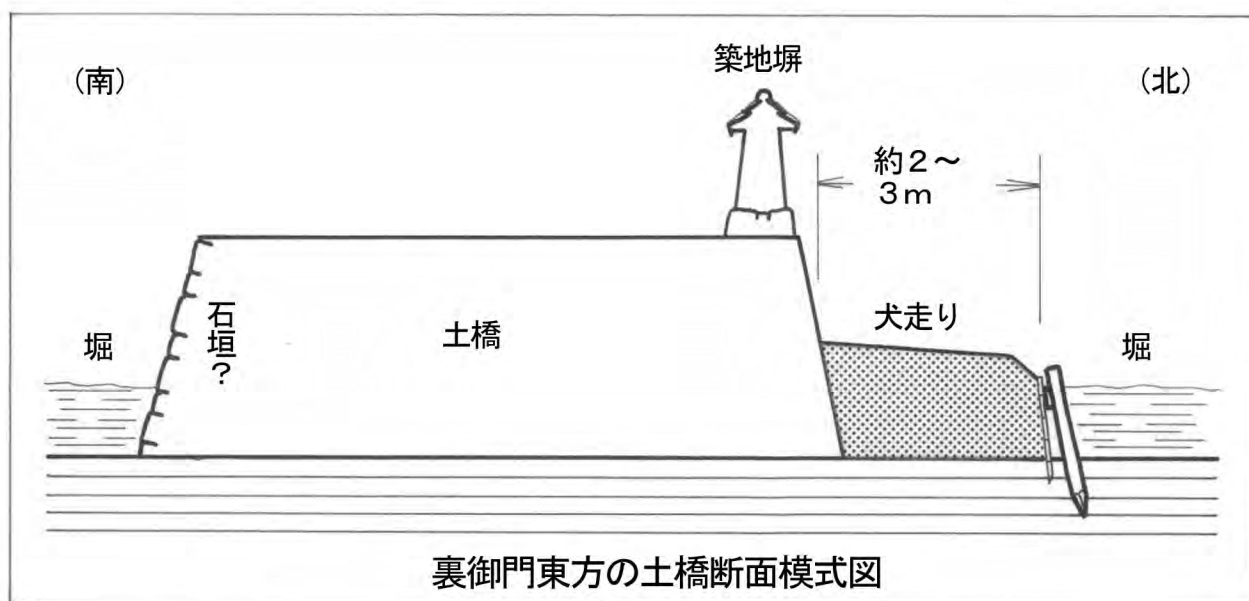
裏御門東方の土橋は本丸から佐賀城南東の城下に通じる橋でした。「橋」といっても大部分に土を盛って築いた「土橋^{どばし}」と呼ばれるもので、東側の一部が途切れて木橋が架けられていました。(この途切れた部分で、南北の堀がつながっていました。)

寛政8年の絵図には、この土橋の様子が詳細に描かれています。橋の西側（城内）には裏御門があり、土橋の通路北辺に沿って築地塀が築かれていたことがわかります。

発掘調査で何がわかったの？

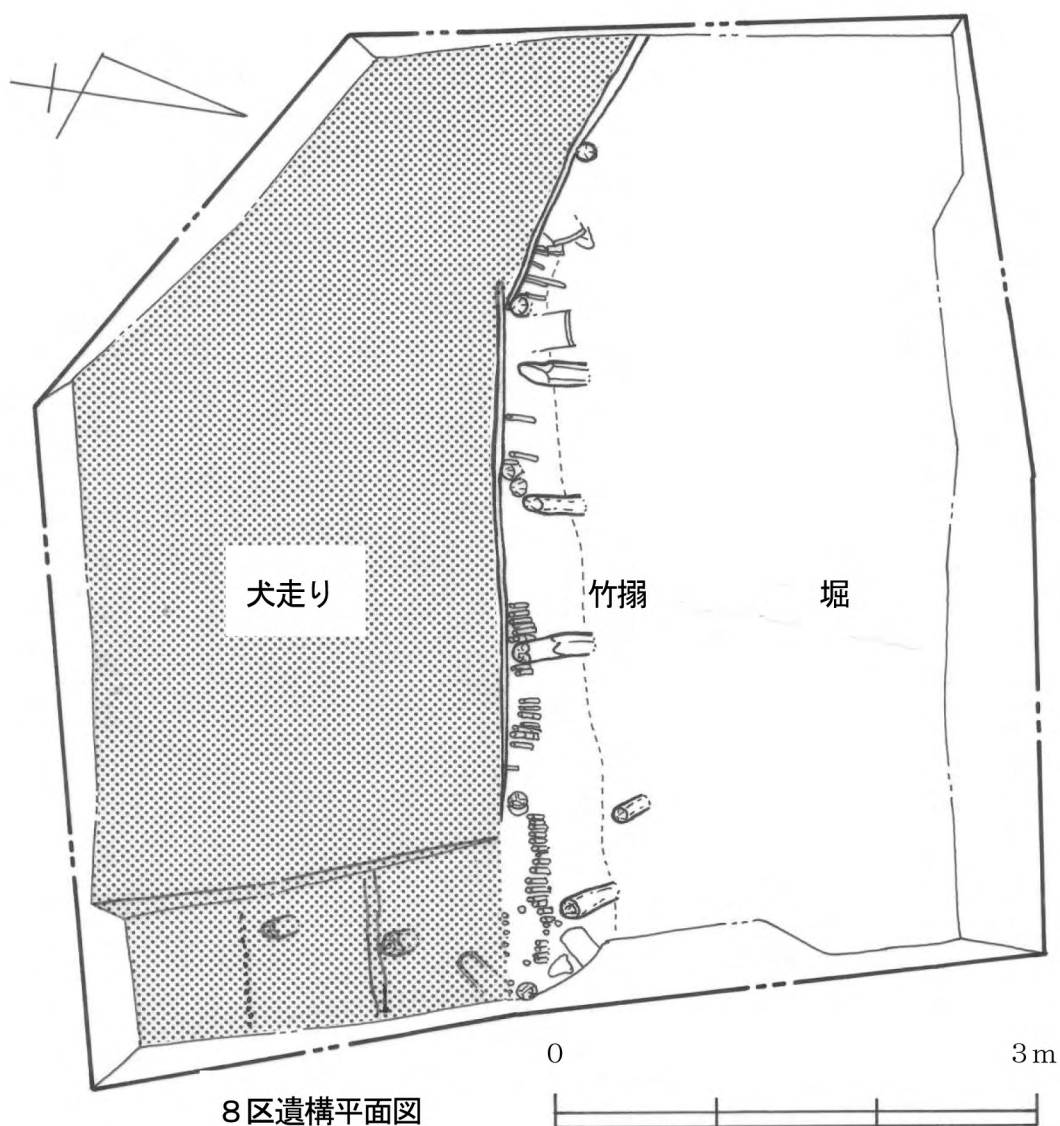
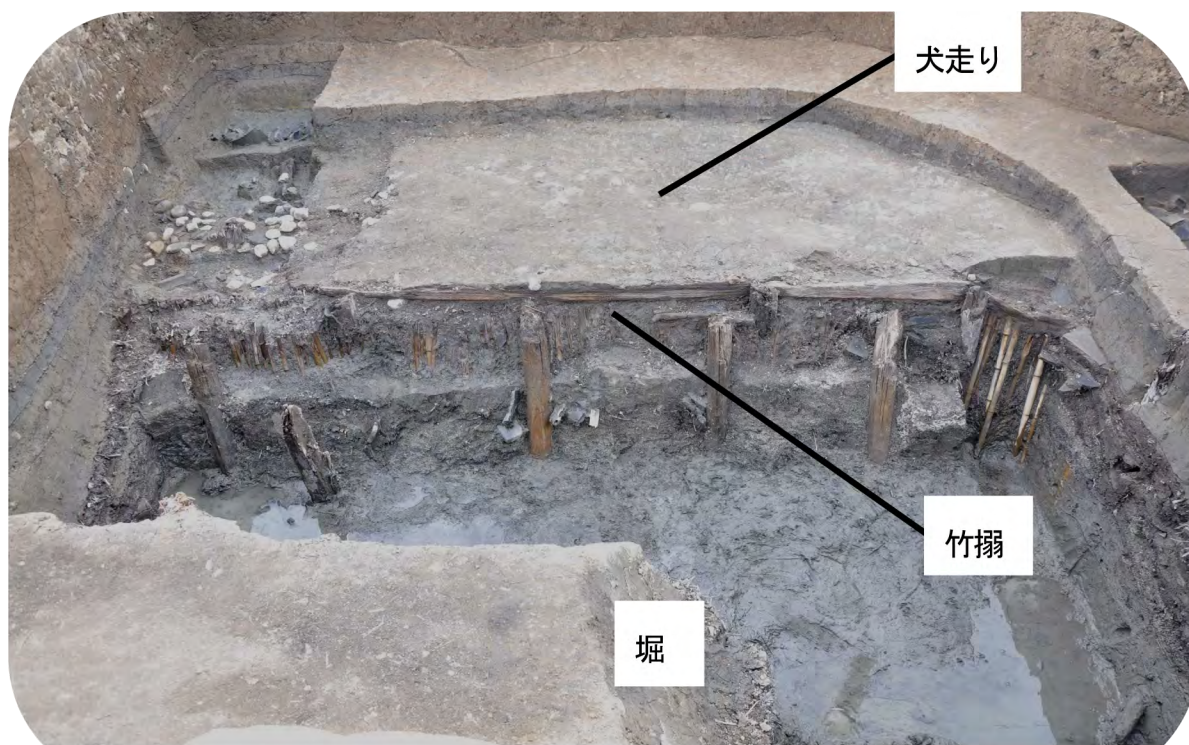
裏御門東方の土橋に関する新知見

寛政8年の『御城分間絵図』を見ますと、土橋北辺の築地塀のさらにその北側に土手状の表現があり、木が生えている（植えられている？）様子が描かれています。今回の発掘調査によって、その土手が確認されました。言い換えると、絵図のとおり土橋の裾部が確認されました。



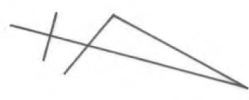
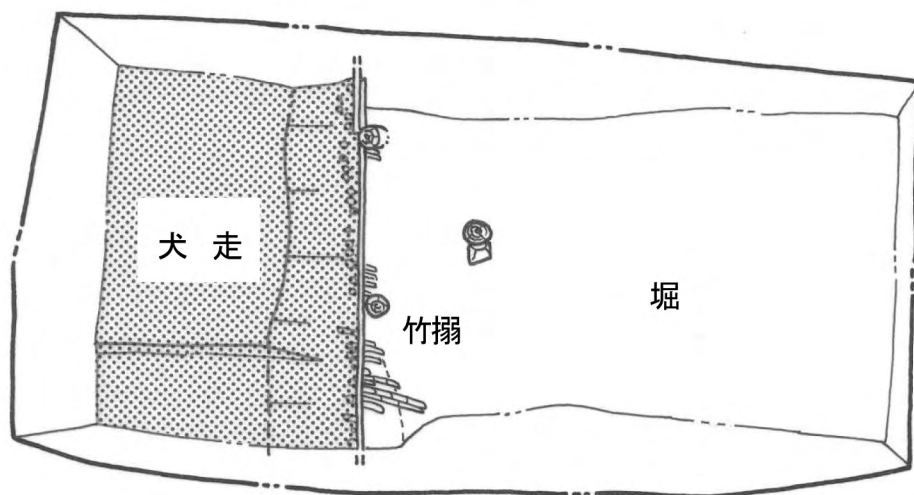
この土手状の表現ですが、調査前までは土橋の斜面であろうと推測していました。しかし、実際は幅約2～3mの平坦面であることがわかりました。土橋の構造としては、犬走りを形成しています。加えて、その護岸は石垣ではなく、竹搦（竹杭による土留め）であることがわかりました。木材等を用いた護岸は佐賀城築城当初に用いられていた工法です。のちに多くの護岸が石垣に変えられましたが、裏御門東方の土橋の犬走り護岸は、廃城時まで竹搦であったことがわかりました。

8 区の遺構検出状況



8 区遺構平面図

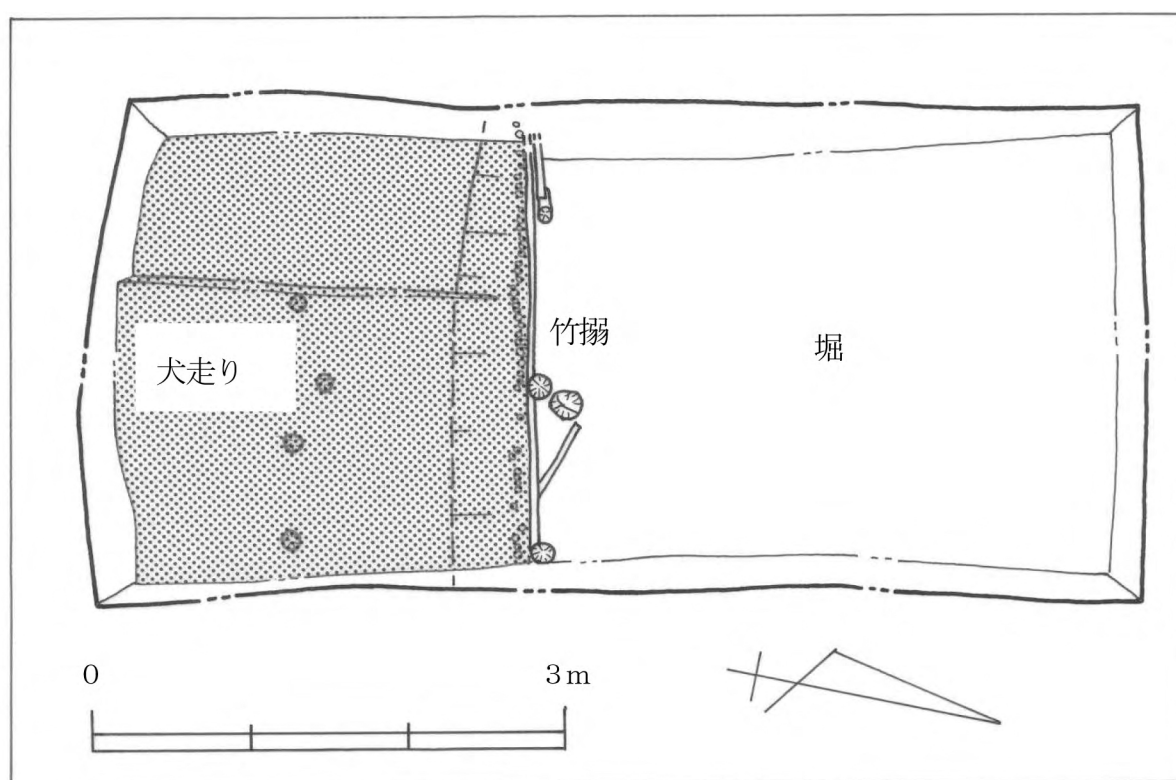
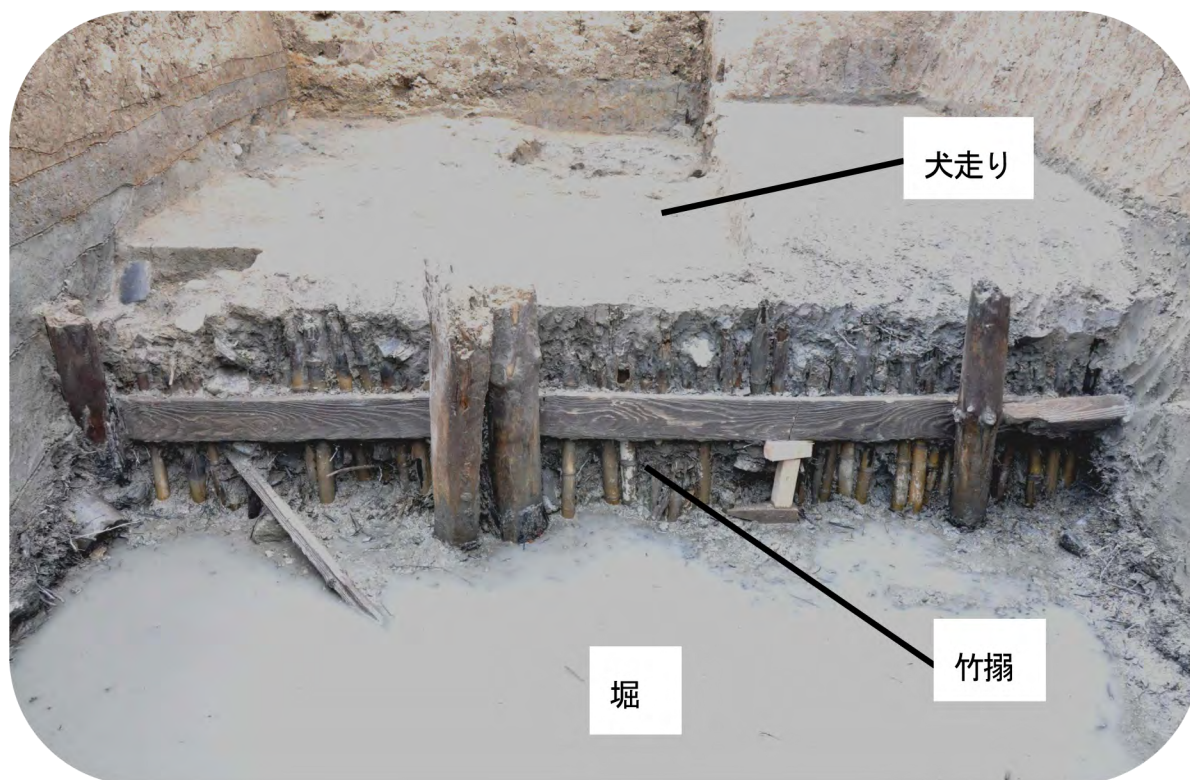
9 区の遺構検出状況



9区遺構平面図

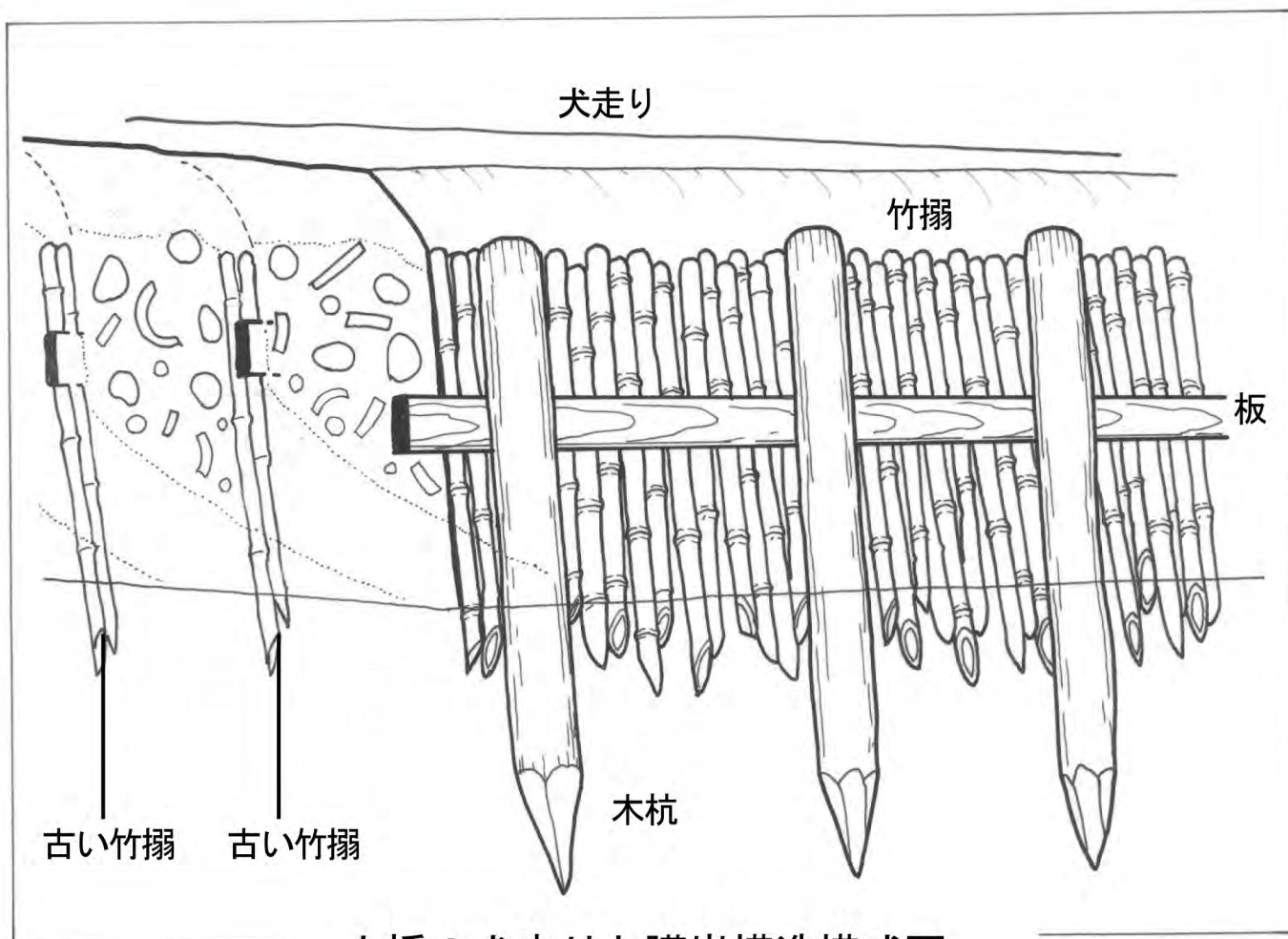


10区の遺構検出状況



10区遺構平面図

土橋の犬走りと護岸の構造



土橋の犬走りと護岸構造模式図

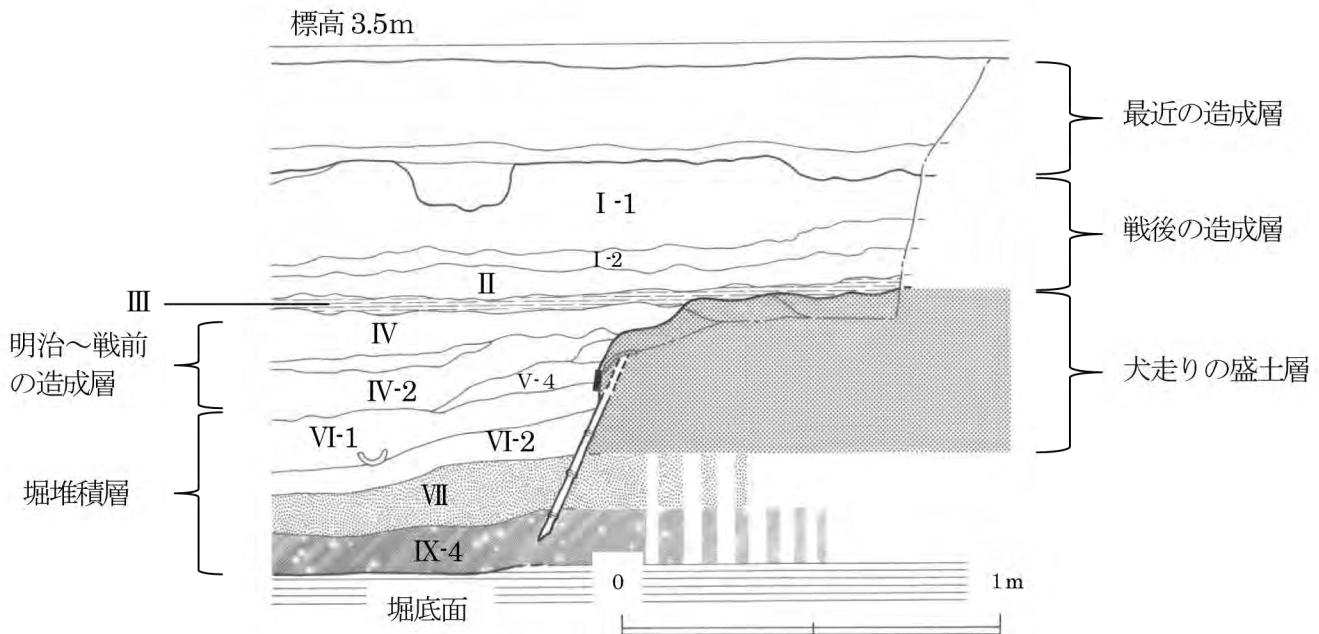
裏御門東方の土橋には、構築当初からこの犬走りが付随していたのかはまだよくわかりません。8区において、犬走りは6度の補修跡が確認でき、補修を繰り返した結果幅2～3mにも及ぶ平坦部ができたことがわかりました。盛土中には多量の瓦破片やグリ石を混ぜ込んで補強しています。

護岸はまず長さ1m前後・直径5cm前後の竹杭を一行に打ち並べたのちに、幅10cm前後・厚さ2～4cm前後の細長い板1枚を横架し、最後に直径10cm前後の木杭を打設して、竹藪全体を外から押さえる構造になっています。

石垣護岸が多く残る佐賀城跡の中で、竹木のみを用いた護岸遺構を確認したのは今回が初めてです。佐賀城の古い護岸手法を残す遺構として貴重な発見となりました。

地層のはなし・・・調査区の地層

考古学では、新旧の時間差や年代・遺構の構造などを、地層の堆積状況を観察して判断・解釈します。ここでは今回の調査区について、どのような地層であったかをご紹介します。



地層の観察図（図は9区東壁の例）

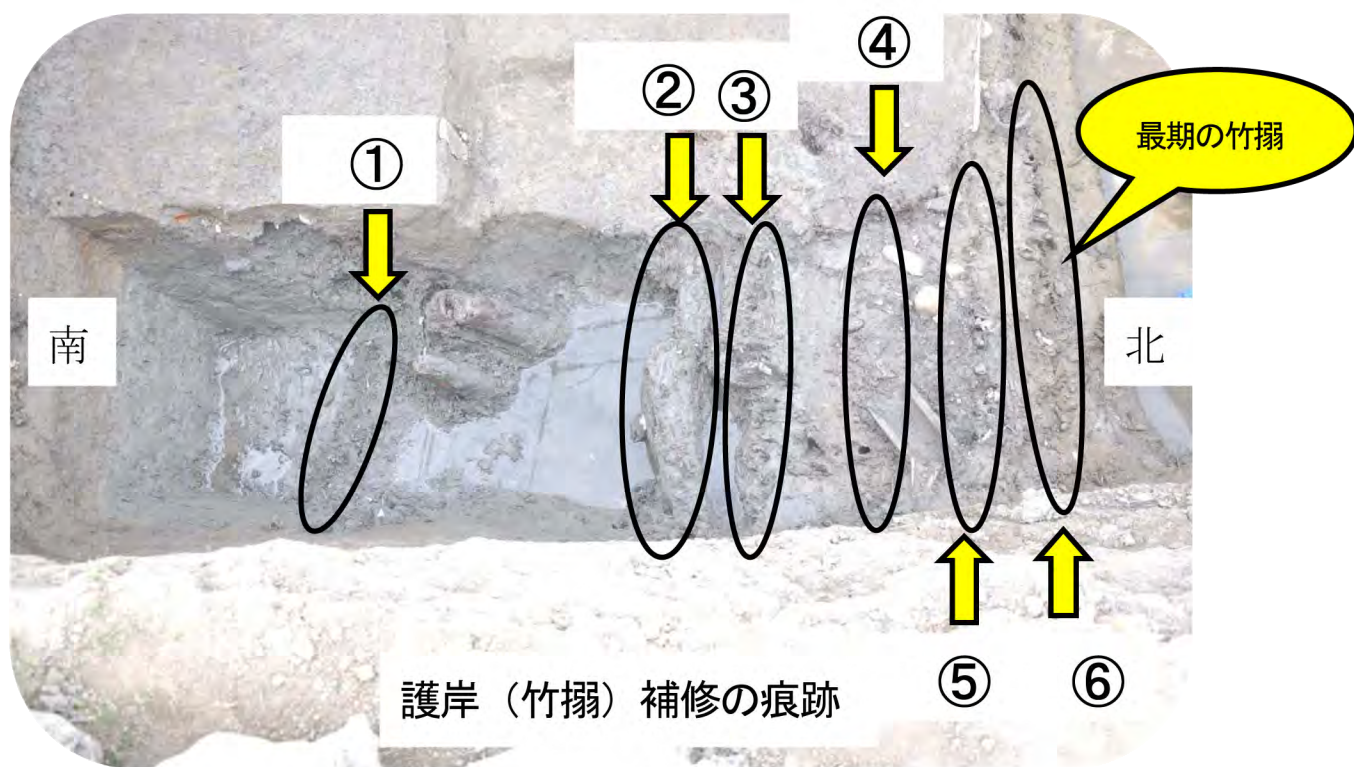
東堀は明治になって埋め立てが始まり、昭和14年頃にはほとんどの部分が埋まってしまったようです。しかし、調査の結果、犬走りはまだ埋まりきっていなかったようです。それは第Ⅲ層の状況からわかります。第Ⅲ層は犬走りの上面（平坦面）直上に位置する層で、8・9・10区のいずれの調査区でも確認できる地層です。この第Ⅲ層には靴のゴム底やプラスチック製品の破片が含まれていました。よって、戦後に堆積した地層であることがわかります。犬走り上面は、戦後間もない頃まで見えていたと考えられます。しかし、周辺が同じ高さまで埋没していたであろう状況から、それが土橋の一部であると認識していた人は少なかったと思われます。

また、地層の状況から、この犬走りは、堀の堆積層の上に築かれていることがわかりました。竹杭の下部には堀堆積層に含まれる樹木の枝がたくさん絡まっており、堆積層の上から打ち込まれたことが確認できました。

裏御門東方の土橋と犬走りについて

裏御門とその東方に延びる土橋は、築城当初から存在した佐賀城の一施設です。しかし、今回確認された犬走りは、築城当初の絵図には描かれていません。犬走りの詳細が初めて描かれたのは寛政8（1796）年の『御城分間絵図』^{おしろぶんげんえず}です。したがって、寛政8年段階では、この犬走りが存在したようです。

また8区の調査では、6度にわたる護岸補修の痕跡が確認されました。残念ながら護岸補修の開始時期についてはわかりませんが、幕末までの間に最低でも6度にわたって犬走りが補修されたことがわかりました。外へ外へと護岸補修をするうちに幅2～3mの犬走りができたものと考えます。

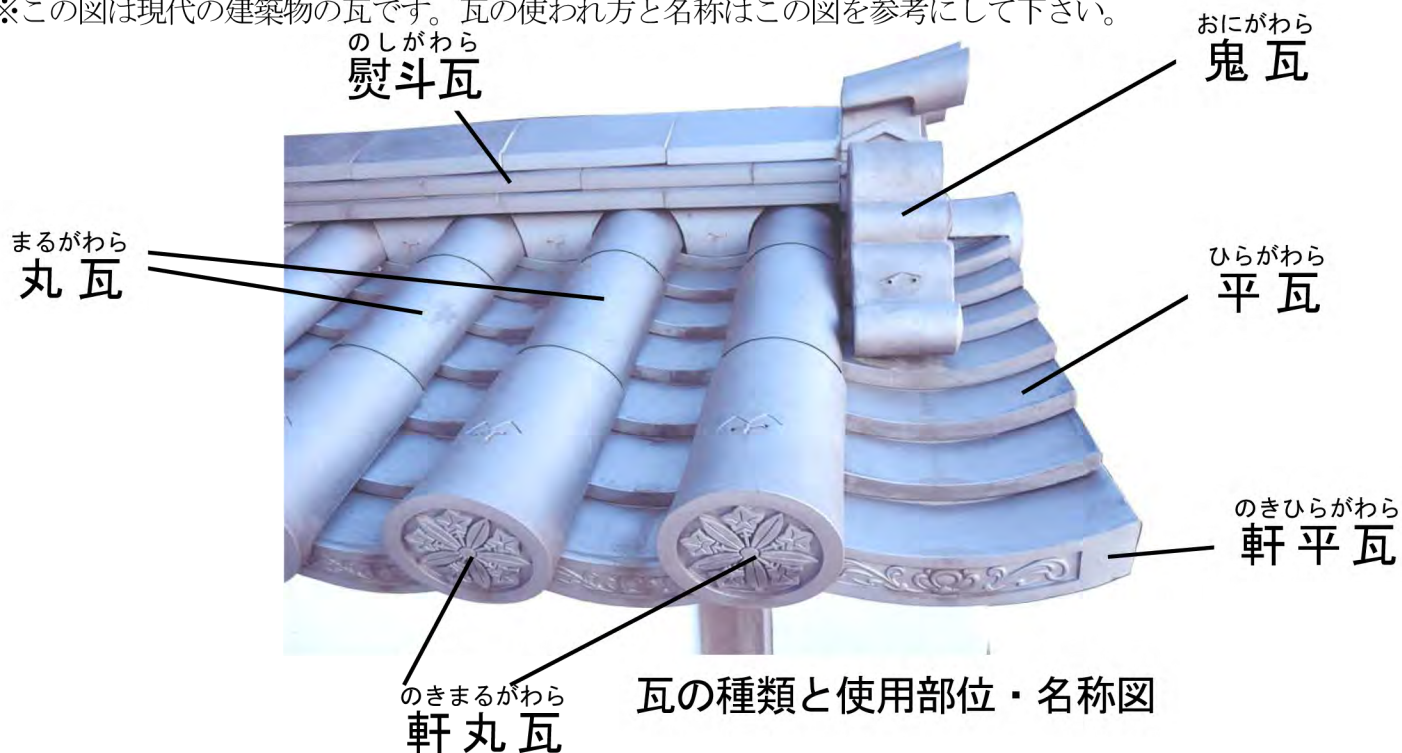


また、この犬走りは、堀の堆積砂泥の上に盛土をして築かれていることが確認されました。したがって、当初から存在したのかは不明ですが、大部分は土橋本体に後付けされたことがわかります。

出土遺物

発掘調査の結果、多数の瓦と少数の陶磁器が出土しました。瓦は天守台の調査で多数出土していますが、今回の調査でも多種多様の瓦が出土しています。最も多いのは小ぶりの薄い瓦で、裏御門周辺の築地塀に使用されていた瓦ではないかと推測しています。中にはごく少数ながら大ぶりの瓦があり、御殿などの建物に葺かれていた瓦であろうと推測されます。それには鍋島家の紋である「杏葉」^{ぎょうよう}の文様があしらわれた瓦もありました。

※この図は現代の建築物の瓦です。瓦の使われ方と名称はこの図を参考にして下さい。



8区出土丸瓦



9区出土丸瓦



②の裏面



9区出土丸瓦



8区出土軒丸瓦



9区出土軒丸瓦



9区出土軒丸瓦



8区出土軒平瓦



8区出土軒平瓦



9区出土杏葉文軒丸瓦



9区出土巴文軒丸瓦



⑬



⑭



9区出土巴文軒丸瓦



⑬



⑭

8区出土京焼風陶器碗



⑬

10区出土鍋島焼七寸皿